最優秀賞

「おやじ」の自転車屋

青森県南郷村立中沢中学校
三年　坂本友美



「『南郷モータースは自営業だ』と思う人、手を挙げなさい。」

先生の声が教室中に響く。みんなの目が一斉に私の方を向く。

「どうして、ウチのこと言うのよ。早く社会の時間、終わればいいのに…。」

皆はさほど、気にしていないだろうが、私にしてみれば大きな問題である。思わず、先生をにらむ私——。

オイルの染みがついたツナギの作業着が黒ければ、スパナを上手に操る手も黒い。その手で汗を拭うから顔も黒くなる——。私の家は、父がバイクや自転車などの修理をし、母が時々、それを手伝っている。

「おぉー、何したがぁ——。」

「休んでげぇ——。」

大きな声が店先で飛び交う。もう、恥ずかしくて恥ずかしくて、友達といる時などは、顔が火照ってくるほどだ。

私の友達のお父さんは、大概がお勤めをしているようで、私の父のように店先で声を張り上げることはない。きちんとした印象が強いのだ。それに引き換え…。

父は、家で引き受ける仕事の他にも、私が通う学校を仕事場にすることもある。(お金をもらうわけではないので「仕事」というのかどうかわからないのだが)私の学校では、毎年、春に交通安全教室があり、正しい自転車の乗り方、歩行のルールを学ぶ。その時に、自転車通学者を中心として、私たちは普段乗っている自転車を学校に持っていくのだが、その百台近くある自転車を母と二人で点検するのだ。午前中、私を含む、皆が授業を受けている間に、両親は、校庭に止めてある皆の自転車を点検している—。そう思うと誇らしい気分にもなる。しかし、黒い作業着は、黒い作業着。所詮、それは、格好の良いものではないのだ。

そんな複雑な思いを持ったまま、中学校も三年目を迎え、今年も、私の両親は来校した。勿論、自転車の点検の為にである。決して自転車屋の需要が多いというわけではない。しかし、いくら小さな村とは言っても、七千人の人口に対して、自転車屋は二、三軒。家での仕事だって忙しいのだ。なのに、どうしてわざわざ…。

「忙しいのに、なして学校まで来るの?それに、何もタダで見なくたって、あれだけの自転車見たら、すごい沢山儲かるべ?」

三年目にして、初めて父に聞いたことだった。たまたま、その時脳裏に浮かんだから聞いただけの、素朴な疑問だった。

「あったの、わざわざ金もらってやるもんでねぇ。おめが毎日、学校で仲良くしてもらっている友達の自転車なんだべ。毎日、楽しく元気に学校に通えるのも、友達のお陰だべ。ありがたいことだべな。」

父という表現をするよりは「おやじ」といった方が似合う。しかし、それは温かい気持ちのこもった「おやじ」であり、私を育ててくれるための糧として、商売を営みながらも、その中にいっぱいの愛情をこめた「おやじ」である。商売をしている父の姿は、もう嫌なくらい見てきた。だが、その中に愛情を感じたのは、その中の愛情を知ったのは、この時が初めてのことだった。

店先の大声も、オイルで黒くなった作業着も、手も、顔も、決して格好いいものではない。しかし、立派だと思う。尊敬に値すべき私の「おやじ」である。外見は見栄えするものではないが、「自転車屋のおやじ」の気持ちが伝わってくる。商いに気持ちを込めた、その意気込みが伝わってくる。これまでは、その気持ちが伝わって来なかった。いや、伝わって来ないのではなく、受け入れようとしなかったのだ。

——自分の気持ちを表現することが苦手な「おやじ」。そして、その気持ちを理解することが下手な「ムスメ」。でこぼこな「おやじ」と「ムスメ」。あの日の一言でようやく父の気持ちが見えたような気がする。ウチの店にお客さんが来てくれるということは、ウチが必要とされているということだ。店先の大声に馴染んでくれている人だって沢山いるというのに、一番身近な私が馴染んでいなかった——。一体私は、今まで何を恥ずかしがっていたのだろうか……。

「社会の先生、いくらでもウチを話題にして下さい。その時には胸を張って授業を受けましょう。なぜなら、ウチは『日本一の自転車屋』だからです。」

この父にして、この娘あり——。やがては、私も父の姿を追い、オイルの染みた作業着を身に付けることになるのだろうか。その時には、店と共に、「おやじ」の気持ちごと引き継いで——。